

【暗証聖句】

「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。」テサロニケの信徒への手紙一 5 章 23 節

【日・イエスの模範】

私たちはイエス様のお姿からどのようなことを学ぶことができるでしょうか。まずイエス様が幼かった時の様子はほとんど聖書に記されていませんが、ルカ 2 章 52 節に一言、「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」と書かれています。短い言葉ですが、実にしっくりくる言葉ではないでしょうか。普通の子供と同様に、知恵が増し、背丈も伸びていく中で、「神と人ともに愛され」て育ったのです。神様からだけでなく、人からだけでもなく、神様と人の両方から愛される子どもとして成長していったのです。各時代の希望を見ると、「特に、優しい性質が表され、いつでも人に仕えるために喜んで手を貸され、その生活には無私の親切心という美德が現れていた」とあります。この人への優しい心が幼い時からあり、そのことが神様からはもちろんのこと、人からも愛される理由の一つだったのでしょう。

また、イエス様が公に出ていかれると、「教え」「宣べ伝え」「癒す」という三つの側面から宣教していかれました。

マタイ 4 章 23 節「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。」

イエス様は霊的な側面だけを強調されたのではなく、知的にも肉体的にも、精神的にも、全人的に人の必要を満たすような形で宣教されたことがわかります。このことは現代の宣教方法にも、大切なことを教えています。私たちも聖書研究を通して聖書の知識を学び・教えます。そして、イエス様の贖いによる永遠の命の喜び、すなわち福音をのべ伝えます。さらに、病める人を癒すために祈り、健康や医療の分野にも積極的に関わっていきます。これらは私たちが幸せに生きていくために、どれも大切なことであり、またこの基本的な働きを通して、霊的にも引き上げられていくのです。

【月・神の宮としての体】

死すべき肉体の中に、不死の魂が宿っているという二元論的な考えは、人間の体に対して様々な間違っただけの考えを生み出してきました。たとえば、古代ギリシャの哲学者は、人間の体は魂の牢獄であり、死ぬことによって自由になると考えました。この異教的な思想は教会の中にも入り込み、肉体は一時的な魂の住みかには過ぎないと体の大切さを軽視するクリスチャンを生み出しました。そうかと思えば創造主なる神を信じない汎神論者は、体こそ神聖なものであり、宇宙を構成する普遍的な神の一部であると考えます。

しかし、聖書は魂と体が一つとなっただけで生きていく者となつたと教えており、両者を切り離して考えるべきではありません。ゆえに、ヨハネの第三の手紙 2 節では、「愛する者よ、あなたの魂が恵まれているように、あなたがすべての面で恵まれ、健康であるように」と、魂と健康の両面で祈っているのです。

そして、その上で、コリント一 6 章 19 節では、「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです」と展開しています。この朽ちる私たち弱い体の中に、清い聖なるみ霊が宿ってくださるとは、何と驚くべきことでしょうか。肉体を軽視することがいかに間違いであるかが分かりますし、この肉体に関しても、聖なる神様が宿ってくださることによってはじめて聖なる者となつたのだということが分かります。だからこそパウロはコリント一 10 章 31 節で、「だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」と、体を大切にすることによって、神様の栄光を表すようにと教えているのです。

しかし、それでもやはり朽ちるこの体には避けることのできない限界があります。そこでパウロは、コリント一 15 章 53 節で「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります」と、未来に目を向けさせます。本来人間は、神様の栄光を表すために、肉体的にも品性の面においても、神様に似せて創造されました。それが罪によって崩れてしまったのです。だから、神様はもう一度本来あるべき姿に回復させることをご計画されたのです。私たちの救いと体の回復はセットなのです。やがて私たちは朽ちることのない、霊の体を身にまとうことになることと教えられています。

【火・キリストの心】

環境を変えることによって、人は変わるものです。それは、私たちが周りの影響を受けやすいからです。そのためより良い人になりたければ、今よりも良い環境のもとに移ることは、一つのきっかけになることでしょう。しかし、それでも完全に生

まれ変わることはできません。なぜなら、私たちの外側の変化ではなく、内側(心)の変化が重要だからです。イエス様は、「これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである」(マルコ 7 章 23 節)と言われたように、心が根本的に変えられる必要があるのです。詩編 24 編 3、4 節でも、「どのような人が、主の山に上り、聖所に立つことができるのか。それは、潔白な手と清い心をもつ人。むなしいものに魂を奪われることなく、欺くものによって誓うことをしない人」であるとあるように、心が大切であることがわかります。

では、その清い心とは何でしょうか。それは、コリント一 2 章 16 節で、パウロが「わたしたちはキリストの思いを抱いています」と言っているように、キリストの思いが私たちの思いとなる、キリストの心が私たちの心となることです。そのために信じる者たちに聖霊が宿っているのです。信仰を持つようになると、何が主に喜ばれることで、何が主が悲しまれることなのか、分かるようになってきます。これは聖霊の働きですが、このことがはっきりと預言されているのが、エレミヤ書 31 章 33 節です。

「しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」

ここに、主の心が反映されている律法を、心に記すと書かれてあります。聖霊が、聖書のことを全部知らなくても、心の中に一番大切なイエス様の思いが何であるかが分かるようにしてくださるのです。イエス様は山上の説教の中で、心の中で罪が始まることを強調されましたが、それは、このように神様が心の中で働かれるからです。私たちの心が神様の思いに支配されていれば、愛が行為となって現れてきます。しかし逆に、神様以外の思いで満たされていれば、悪い行いとなって出てくることでしょう。これは、確かに聖霊が働いて神様の思いが何であるかを悟らせてくださいますが、自分自身の肉の思いも生きていて、またサタンの誘惑もあり、心の中で常に戦いが繰り返されているからです。この戦いに勝利するためには、日々祈り、み言葉を学び、キリストと一つとなることを心から望んで、自分を主にゆだねることしかありません。

「キリストと一つになるとき、私たちはキリストの心を持つようになるのです」(セレクトドメッセージ第一巻 337)

【水・聖霊の働き】

イエス様は、「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである」(マタイ 7 章 21 節)と言われました。神様の心を生きている者だけが天国に入るのです。そのためにも、キリストの心を自分の心とすることがどれほど重要なことかがわかります。そのために聖霊が私たちの内側で働き、私たちは神様のみ心が何であるかを悟らせてくれるのです。神様のみ心を、明確に知りたければ、まず聖書を開くことです。そこに神様の心がはっきりと書かれてあるからです。み言葉を読み、学ぶときには、聖霊が力強く働き、み言葉の中に示された真理を悟ることができるように導いてくださいます。

ヨハネ 16 章 8 節「その方(聖霊)が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする」

ヨハネ 16 章 13 節「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」

神様の御霊が一人一人に働いて、真理を悟らせてくれる。これは本当に驚くべきことです。

【木・聖霊の訴えに備える】

ペトロの手紙二 3 章 14 節で、「だから、愛する人たち、このことを待ち望みながら、きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけるように励みなさい」と書かれてあります。聖霊が働けば自動的に神様の御心を生きられるようになるわけではないことがわかります。真理を悟ることと、それを生きることは、また別なことです。私たちは神様に喜ばれる者になりたいと心から願い、そのことを真剣に主に祈り求めていくことが大切です。そして、これを先延ばしにしてはなりません。聖書は「今日」、それをせよと教えています。

詩編 95 編 7 節「主はわたしたちの神、わたしたちは主の民。主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。」

ヘブライ人への手紙 3 章 7、8 節「だから、聖霊がこう言われるとおりに。「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、荒れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのように、心をかたくなにしてはならない」

正しいことが分かっても、それを後回しにするなら、しないのと同じです。そして、そのとき心は神様ではなく、どこか別のところにあるのです。なぜ、「今日」が大切なのでしょう。それは明日に伸ばすごとに、サタンが入り込む隙を与えてしまうからです。サタンは私たちが真に神の子に生まれ変わっていくことを最も恐れているのです。それと共に、誰も明日があるかどうかわからないということ、今日を大切にしなければならぬ大きな理由です。